

ウェブサイト「川崎在日コリアン生活文化資料館」が展示するもの

—歴史を記録する実践の論理—

橋本 みゆき*

“Museum of lives and cultures of Korean Residents in Japan, Kawasaki” (MLCKK) is an online history museum that was established by a citizen association named “2000 member's network to tie to elder Koreans in Kawasaki.” I would like to consider what the museum can do through the constructing process as one of the administrative and working volunteers of MLCKK. The main showpieces are 1) the reorganized narrative data of life histories of elder Korean residents, 2) images or document material data to understand them, 3) interaction between elder Korean residents and people surrounding them.

1. はじめに

2006年夏、「川崎在日コリアン生活文化資料館」（後述）活動の一環である聞き書きに参加した。私の班がお話を聞かせていただいた語り手の中に、植民地下朝鮮南部のとある港町出身の女性、韓さんがいる。彼女の従姉が日本在住のある朝鮮人男性と結婚しており、母親は、その男性の弟に自分の娘を嫁がせようとしたらしい。彼女が18歳のとき、日本語も知らないまま無理やり連れてきて、結婚式を済ませると彼女を置いて帰ってしまった。それが彼女の在日生活の始まりである。

子供が3人になった頃、戦争が激化した。

町内ってあるんですね、組になって。バケツに水汲んで、飛行機なんて飛んできたら、爆弾落ちたらそれ消すんだって言って。リレーにして、みんなそれ並んでかけたら、そういうふうにして。そして今度は竹槍ね。いま考えたら、「なんであんなこと。頭いい人とか、いなかったのかな」って思う。こういう棒、持つ

*立教大学兼任講師

て、人間が飛行機から降りてくると、向こうの国の戦争の兵隊とか降りてきたら、みんな叩いて殺すんだって言って、みんな棒持たして。そういう練習さ、子供負ぶって行ったりしたんだよ。

戦争が終わると今度は、飲酒が過ぎた夫が四十そこそこで亡くなった。彼女は女手一つで5人の子供、さらには事故死した弟の息子計6人を育てなければならなくなる。渡日以降の話をひとしきりして、「もう、話(に)ならないです」と彼女は苦笑した。

在日一世の渡航史を本で読んでいた私は、ある程度の苦労話は予想していた。そして、おそらく当時の多くの人が共有した戦争体験。「誰もが苦労した時代」のお決まりの話が目の前で繰り返されるのを半ば傍観していた私がはっとしたのは、「いま考えたら、『なんであんなこと。頭いい人とか、いなかったのかな』って思う」という彼女の言葉である。「全然学問ない」という彼女の経歴は、当時の朝鮮女性には全く珍しいものでないが¹、その彼女が、戦争のばかばかしさ、受身とはいえ戦時体制を支えた知識層の無力を、経験的に見抜いていたのである。私はその瞬間まで、戦争に翻弄された民衆イメージにただ彼女をあてはめていた。それが、戦争を体験した上で冷静に捉え返す言葉に出会い、共感的に力強く説得された。竹槍練習なんて庶民をばかにしている、戦争は愚かなこと、知識がある人もそういうときにものをいう力にならなければしょうがない……。

聞く者を惹きつける波乱万丈の生活史。若いうちの体験では到底至りえない人間観・社会観。在日韓国・朝鮮人²高齢者(以下、「在日高齢者」)たちの語りは、聞けば聞くほどとにかくおもしろい。しかし個人的な興味や愛着を満たせばよいのではない。また一方で、在日高齢者の語りを聞くことのできる時間がもはや限られているという現実がある。けれども、消えゆく希少なものだからといってただ保存することに意味があるとも思わない。在日高齢者である彼／彼女の語りには、それを聞く私たちあるいは社会に対してもつ価値があり、私たちの世代の行動を方向づける示唆があるように感じられる。私たちはそれをどのようにして取り出し、どう生かすことができるのだろうか。

社会学者の小川伸彦は、博物館を、「本来あった場の記憶を内にふくむモノたちが、新しい文脈を構成するべく収集・保管・展示されている場所」[小川1999: 231]と表現する。展示のためには、さまざまな展示品を横断して有効な、何らかの普遍的論理に立つ、意識的な再文脈化の過程がある[小川1999: 230]。もしも博物館が何かを表現し課題を解決していく手段になるとするなら、在日高齢者の語りを展示する「川崎在日コリアン生活文化資料館」に、私は何を期待するのか。一人の博物館活動参加者

として、博物館としてなしうるものの可能性[朝日新聞「記憶を作るもの 歴史博物館」2007.12.31]を考えてみたい。

2. 資料館サイトの概要——設立の経緯と展示内容

川崎在日コリアン生活文化資料館(以下、「資料館サイト」)は、川崎市の通称おおひん地区にあるふれあい館³を拠点とする市民団体「かわさきのハルモニ、ハラボヂと結ぶ2000人ネットワーク⁴」(以下、「2000人ネット」)が2006年4月、インターネット空間に立ち上げた博物館である(URLは<http://www.halmoni-haraboji.net>)。学芸員や専用施設をもたないため、博物館法的に分類すれば資料館サイトは博物館類似施設(後述)になるだろう。私は同年5月の準備検討会議より運営に参加し、主に聞き書き記録の整理とメールマガジン発行を担当している。なお「ハルモニ」、「ハラボヂ」とは、それぞれ韓国・朝鮮語で「おばあさん」、「おじいさん」の意味である。

資料館サイトの設立は、ふれあい館ないし法人の2つの事業展開と密接な関係がある。一つに、ふれあい館の社会教育事業として、開館以前を含めると30年近くの歴史をもつ識字学級がある。ここに通う学習者は今でこそ来日もないニューカマー外国人が大多数を占めるが、当初主たる対象であったのは、朝鮮でも日本でも就学の経験がないオールドカマーの在日韓国・朝鮮人一世である。1990年代後半、識字学級のボランティアたちは在日一世への生活史聞き書きを開始した。その背景には、高齢のため身体の自由がきかず識字学級に通うのも困難になった在日一世の、高齢者福祉ニーズの高まりがあった。1997年度には法人のプロジェクトとして、研究者の協力を得て「川崎 在日韓国・朝鮮人の生活と声」調査を行い、その成果を引っさげてふれあい館職員、ボランティア、そして在日高齢者当事者たちが、市当局に対して在日高齢者無年金問題⁵の救済を要請するという行動をおこした。

この調査を通じて調査関係者および在日高齢者ら自身に明らかになったのは、調査結果だけではなかった。それは、語ること・聴くことという活動自体の意義である。すなわち、調査する方は在日高齢者の語りの力(自己表現力、情報発掘)を、語る側は語りがい(若い人に聞かせる手ごたえ、自分のまんざらでもない半生への自信)を認識したのである。

もう一つは、法人の高齢者・障害者支援プロジェクトでミニ・デイサービス事業を実現するため1998年に結成された、在日高齢者交流クラブ「トラヂの会」(「トラヂ」は韓国・朝鮮語で「桔梗」の意)である[社会福祉法人青丘社1999:14]。以後、トラヂの会の例会には、同胞と一緒にのびのびと過ごす場を求める在日高齢者が集まりその数は増えてゆき、次第に在日高齢者に関心をもつ比較的若い人も訪れてくるようにな

る。その中の一人、写真家の菊池和子さんが約2年半の間トラヂの会に通って撮りためた写真が、2002年、川崎駅前のギャラリーで写真展・生活史展「かわさきのハルモニ、ハラボヂ展」として公開されることになった。このとき開催母体として立ち上げられたのが2000人ネットである。

資料館サイトは、2000人ネットという、在日高齢者に関心を寄せ川崎市内外から集まる市民たちの表現媒体の一つである。ただし「2000人」の名を冠していても、資料館サイト運営に継続的に関わっている実働メンバーは10人前後であり、活動の支柱を担っているのはふれあい館の高齢者事業担当職員Mさんである。運営費は、公募により獲得した市民活動助成金および寄付で賄われている。

資料館サイト開設の趣旨は次のように説明される。「私たちは、新しい共生の時代を生きる市民として、同じ時代と場所を生きてきたもの同士が、事実としての生活史を共有する作業が求められていると思います。そのための『活動、交流の場としての生活文化資料館』をバーチャル空間で作り出し、情報発信と共有を図りたいと考えています」。そして具体的活動としては、「在日高齢者を囲み、多くの日本人市民と共に、『世代と民族をつなぐ学習、交流プログラム』を実践し、学習内容を情報発信」することとし、活動における3つの課題を提示する。

- ①世代を越えた多くの市民に、差別の醜さ、戦争の悲惨さを学習する場を提供し、人間が大切にされる市民社会の一員として自己確立することに寄与する。
 - ②在日コリアン3世4世の世代が、在日コリアンとしてのアイデンティティを確立できる場と機会を提供する。
 - ③在日コリアン高齢者が、「辛かったけれどかけがえのないわが人生」を尊重し共感関係を広く結び作ることにより、「自己回復」を図ります。
- そして、この歩みが、「共に生きる地域社会の創造」に寄与することを願ってやみません。[<http://www.halmoni-haraboji.net/basicinfo/info-unei.html>]

「新しい共生の時代を生きる市民」である、①世代を越えた多くの市民、②在日コリアン3世4世の世代、③在日コリアン高齢者の「活動、交流の場」を作ること。こうした課題認識は、資料館サイト館長(ふれあい館館長兼任)の、「他民族と共に生きることこそが日本社会が豊かに形成されてきたという歴史観を共有したい」[<http://www.halmoni-haraboji.net/basicinfo/info-director.html>]というあいさつでも通底する。

資料館サイトをのぞいてみよう。入館＝サイト閲覧は、当然ながら無料である。初

期画面でどぶろく造り⁶の甕の画像をダブルクリックすると、総合展示案内が現れる。そこは5つのゾーンに分かれており、現在閲覧可能なのはそのうち3ゾーンである。「資料館について」ゾーンで資料館サイトの予備知識を得て、「常設展示室」ゾーンで、トラダ会に通う在日高齢者の生活ぶりをまとめた紙芝居風読み物や聞き書き記録、識字学級学習者たちの作品群を見る。冒頭で紹介した聞き書きの抜粋もここに収められている。「資料室」ゾーンではさらに詳しい情報を分野別に集めることができる。もっとも、資料館サイト開設当初から、とにかく展示を始めて徐々にバージョンアップしていく方針をとった事情もあって、今なお構築中のページが多い。

資料館サイトの運営活動は、年2回程度のサイトのバージョンアップという形で可視化されるが、サイト展示は資料館サイト活動の一部に過ぎない。展示の前段階には、趣旨に賛同して実質的作業あるいは立案に関わる参加者を募って呼びかけ、協同作業実践に持ち込み、収集した資料を整理してサイト用データに加工するという準備活動があり、さらにまた展示の後段には、事業参加者およびサイト訪問者からのフィードバックを受けて、それもサイトに反映させたり、メールマガジンにより情報発信を行うフォローアップ活動がある。これらと並行して関連情報収集や勉強会を行う企画もあるが、構想中である。

資料館サイト活動の特徴は、「活動と交流」を介したさまざまな参加者たちの関係形成と、それらの人びとの実践過程を想定していることであり、それはヒト志向といえるだろう。特に、設立趣旨の「在日高齢者を囲み」という表現に見られるように、展示の対象である在日高齢者を単なる客体とするのではなく「共に生きる」ことの実現主体に位置づける点が重要である。

3. 手段としての歴史系博物館類似施設

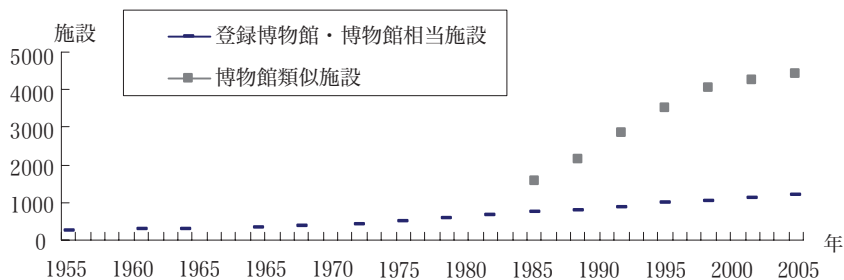
博物館学者の伊藤寿朗は、博物館を他の機関から区別する条件として次の4つを挙げた。①オリジナルな資料を所蔵(飼育を含む)していること、②継続的な展示施設・設備をそなえていること、③職員による独自の公共的運営がなされていること⁷、④継続的な一般公開を目的としていること、である[伊藤1993: 5]。これらの趣旨に照らすと、資料館サイトは独自の土地・建物、専門スタッフこそ持たないが、今日の情報技術と情熱的な兼務職員および有志ボランティアに支えられた、博物館の一つであるといえる。

しかし博物館法(1951年制定)によると、「博物館」とは、第2条において、「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む。以下同じ)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーショ

ン等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（図書館を除く）で、なおかつ地方公共団体および公益法人等の法人が設置し、同法の規定による登録を受けたものに限られる。この条項に該当するのは、いわゆる登録博物館という狭義の「博物館」であり、法人格をもたない2000人ネットが運営する資料館サイトは非該当である。

しかしながら今日、博物館と呼ばれている施設は登録博物館だけではない。国の補助金交付や税制優遇措置を受けられる登録博物館は、むしろ少数派である。文部科学省の2005年度社会教育調査および生涯学習・社会教育施設調査によると、日本全国には登録博物館が865館あるが、このほかにも博物館相当施設331施設、博物館類似施設4418施設という数字がみられる[http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index04.htm]。博物館相当施設とは、博物館法上、登録博物館よりも緩やかな基準で設置できる「博物館の事業に類する事業を行う施設」であり、また博物館類似施設とは、同法の枠外で「博物館と同種の事業を行う施設」である。以下で「博物館」というときは、特に断りのない限り、登録博物館・博物館相当施設・博物館類似施設の総称の意味で用いる。広義の博物館は、法が規定する以上に多様に多数が存在するのである。本稿では、下でみるような状況に鑑み、特に博物館類似施設に注目する。

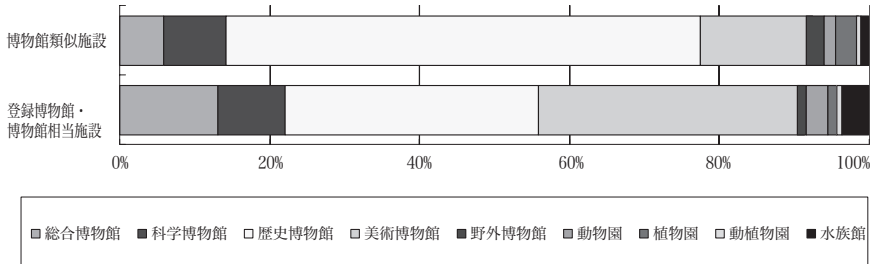
登録博物館・博物館相当施設と博物館類似施設の施設数の推移(図1)をみると、博物館類似施設の増加が目立つ。博物館類似施設は博物館法の規定に拘束されないため、設置主体や職員、年間開館日数、施設(土地・建物)等に制限がなく、都道府県教育委員会での登録も課されない。上述した施設数は、登録博物館と同様の事業を行い都道府県教育委員会では把握している博物館類似施設のみなので、実際にはさらに多いとみられる[金山2003: 20-21]。



(出所)文部科学省[http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/004/h17/003.htm]より作成。

図1 博物館施設数の推移

では博物館類似施設の中身にはどんなものがあるだろうか。まず博物館種類別内訳を見てみよう。図2より、博物館類似施設において全種類の63.3%と圧倒的多数を占めるのは、歴史博物館である。これに対し登録博物館・博物館相当施設では、歴史博物館(33.9%)は目立つものの、最多は美術博物館(35.4%)であり、総合博物館も相対的に多い。



(出所) 文部科学省 [http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/004/h17/003.htm] より作成。

図2 博物館の種類別構成比

次に博物館類似施設における歴史博物館の設置者内訳をみると(表1)、市(区)・町・村を合わせた自治体が8割近くを占める。しかし、公立以外にも一定程度存在することに注目したい。「法人」および「その他」、すなわち財団法人やNPO、企業、個人、大学など[金山2003:16]である。歴史博物館が博物館全種類に占める割合でいうと、国立・市区町村立では7割強と高いが、法人・その他でも4割に達する。たとえ小規模であろうと流行⁸であろうと、それぞれの立場から、歴史への関心が今日そこかしこで表現されているのである。

表1 博物館類似施設における歴史博物館の設置者構成

	国	独立行政法人	都道府県	市(区)	町	村	組合	法人	その他	計
歴史博物館数	95	8	86	1326	758	143	2	106	271	2795
全種類に占める歴史博物館比	74.8%	18.2%	32.3%	69.2%	77.1%	78.1%	25.0%	43.4%	41.9%	63.3%

(出所) 文部科学省 [http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/004/h17/003.htm] より作成。

歴史は展示できるのか。この問いに基づいて、博物館実務経験の長い村上義彦の示唆的な指摘がある。歴史といえ、語られるもの、また綴られた書物を読むことにより理解されるものと認識されてきた。しかし歴史博物館は、モノに歴史を語らせると

いう方法をとる[村上1992：ii]。そして究極的には、歴史展示は全く新しい概念規定に基づく歴史空間を提供することにより成立するというのである[村上1992：31]。つまり資料それ自体が歴史を直接に表すのではなく、展示によって歴史は描かれる。言い換えると、従来流通してきた歴史物語とは別の主張が展示空間において可能になるということである。

浜日出夫は反対方向の指摘をする。地方の博物館の解説パネルは、少し手を加えれば実は全国どこの歴史博物館でも使うことができるものである。そのため当該地方は日本の歴史の一部分を構成するものと了解されることになり、そのような意味で博物館のうちにはナショナリズムの文法が内蔵されているというのである[浜1998：160]。

既存の支配的な歴史物語を後追いつける展示も、それに対抗するシナリオによる展示も可能である。それは、歴史展示の媒体となるモノ(展示資料)が、それ自体では歴史という抽象情報を伝達することができないからである[村上1992：9]。素資料はその価値を判断され選択され、資料としての活用の条件・方法が決定されて、はじめて博物館資料になる[伊藤2003：22]。したがってその過程で別の価値が重視されれば、別の意味を持たされた資料となる。とりわけ歴史博物館において、資料が示す意味は、展示する側の視点や主張に左右されることになる。

資料館サイト活動でも、参加する一人ひとりの「私」あるいは集合的な「私たち」が何らかの普遍的論理をもっており、その最大公約数は「平和」や「異質な者との共存」という言葉だろうと思われる。資料を基礎にしつつも、展示する者に表現する余地が残されている点は、歴史博物館づくりのおもしろさであるとともに危うさであるのかもしれない。

4. どんな展示によっていかなる歴史を描くのか

資料館サイトの主な資料は、①文章(語りの記録および語り手に関する基本情報、展示物の解説という文字・音声データ)と、②モノの絵(語り手たちの写真や地図、生活財、建物などの画像・映像データ)である。これらは、表情や名前をもつ在日高齢者(と周囲)の具体的な誰か、彼／彼女が置かれた状況、出来事が起きた場所を目に見える形にし、資料館サイトを訪ねる者にそのリアリティを伝える。訪問者が展示の論理にたどり着くためには、説得的な展示でなければならない。抽象的事柄を扱う歴史博物館ゆえ、特に①文章が担う役割が大きい⁹。②モノに意味付与する際にも文章を伴うのである。

では展示資料は、ある一つの「普遍的論理」の正当性を裏付ける証拠としてのみ意味があるのだろうか。だとすると、例えば「平和の実現」という主張であれば、在日韓国・

朝鮮人が平和の推進役であるという含意のある資料が必要である。しかし果たしてそれだけを展示すれば説得的になるのか。実際には、警察の目を気にしつつどぶろく造りで家計を支えたり、同胞同士の金銭トラブルに悩んだりという語りは珍しくないが、一見非「平和」的な資料は無視すればよいのか。いずれにせよ、偏った展示では資料としてのリアリティを欠くことになる。語りを証拠として利用するにとどまる限り、語りから新しい価値を発見することにつながらなければいかりか、語り手本来の興味深い人間性は出る幕がない。

資料館サイトはどんな展示をしているのか。「常設展示室」ゾーンの「世代間交流事業報告(2006)」の「在日一世からの夏休み集中聞き書き事業」コーナーと、「資料室」ゾーンの「徴用」コーナーを例に、展示を見ていこう。

聞き書き事業報告のページには、語り手のプロフィールと語りの抜粋(一部音声つき)のほか、聞き書き参加者の感想文がアップされている。たとえば大学教員の大越さんは、「ハルモニのお話にはご本人が意図されているわけではないが、確固たる人生哲学がある」ことに気づき、「それが生活にしっかりと密着した飾らないことばで語られるとき」に出くわした経験を書いた。「人に騙され、苦労ばかりしてきたと話したハルモニ」は、「読み書きができれば人に騙されなかったのではないか」という聞き手の解釈をよそに、こう語ったという。

字が読めないから、人を信じなきゃ仕方がない。相手の言うことを信じてやります。だからわたしは世の中を渡るのが下手なのです。

[<http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/report/200608kikigaki/hist006.html>]

感想文は続く。「驚きとともに、自分の浅はかな思い上がりと、全てを乗り越えて来たハルモニの逞しい生き様に思わず涙が出そうだった。どんなに人に騙されようと、人は人を信じる気持ちを失っちゃ駄目！これが今回のわたしが一番心打たれたことです」[<http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/report/200608kikigaki/kanso/kanso05.html>]。不就学＝非識字という事柄を問題の原因として無意識のうちに絶対化していた聞き手が、非識字という逆境を受け止めた上でまっとうに生きようとしてきた語り手の「人生哲学」に圧倒された例である。

また山田さん(大学教員)は、語りの「本当の内容」を理解した瞬間をつづる。

KSさんから、自分はまるで「家政婦」としての仕事を望まれて嫁いできて、嫁ぎ

先で舅，姑，夫，その兄弟の世話に全力を尽くしてきた。それなので，子育てなどすることができず，自らが生んだ子どもには何もしてやれず，放任の状態だったと聞かされました。その上で，KMさんから，「トラジの会ではみんな歌を歌ったり，踊りを踊ったりして楽しむが，この人(KSさん)は，歌は歌わないんです」と言われたことに対しわたしがKSさんに，「どうして歌わないのですか？子育ての時に子守歌なんかは歌ったのではないですか。みなさん朝鮮半島の子守歌とか歌っていますよね」と言ったことです。その時，KMさんから，「ですからこの人(KSさん)は，子育てなんかできなかつたと言ったでしょ」と指摘され，聞き書きしていながら，聞いた言葉の字面だけ理解し，本当の内容は理解していなかつたと気づき，自らの未熟さを反省しました。

[<http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/report/200608kikigaki/kanso/kanso11.html>,参考 <http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/report/200608kikigaki/hist010.html>]

「歌わない」と語られたエピソードが問題にしていたのは、歌に関する知識や好き嫌いではなく、働きづめで子守歌すら歌えなかつた婚家暮らしの苦勞であつた。もしも“朝鮮文化”や“朝鮮人の生活様式”の変容を一般的に記述するだけであれば、この項目はYes-No式に「歌わない」と処理すればよく、「本当の内容」は必要ない。しかし「歌わない」ことから新しい意味を取り出そうとするなら、語り手の生活感覚に接近する姿勢が求められる。語りに触れることで、聞き手はむしろ自らの中の物差しに気づかされる。資料館サイトは、聞き手のこうした衝撃も織り込んで資料化するのである¹⁰。

次に「資料室」ゾーンに入ろう。ここには当事者たちが提供した写真や書類をはじめ、ふれあい館の諸事業の中で蓄積されてきた新旧の資料が展示されている。一例として、^{ボックス}朴順伊さんが提供した1枚の古い写真から資料の中に分け入ってみる。



図3 「佐渡徴用」

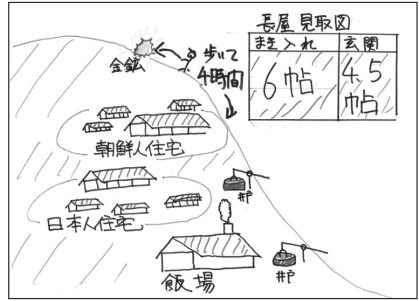


図4 「佐渡飯場」

[<http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/archives/sheet02/sheet2-chouyou.html>]

集合写真に収まっているのは、戦前に徴用されて佐渡の釜山で一緒に働いていた女性たちである(図3)。後列右から3番目が朴順伊さんである。そして右側の手書きの図4は、朴順伊さんの記憶をもとに、釜山労働者たちが寝起きた長屋と飯場と作業場の配置を再現したものである。この図は、在日高齢者の語りを記録するワークショップ(ふれあい館で1999年に開催)において、朴順伊さんに徴用経験の話聞いた班が描いたものであるが、このとき私も一般参加しており、たまたまこの班の一人だった。

戦後、朴順伊さん夫婦は川崎に移り住み、スクラップ工場を始めた。朴順伊さんは「常設展示室」ゾーンの「主展示 ハルモニ・ハラボヂのすむまち」コーナーでも顔写真付きで紹介され、川崎おおひん地区を形成してきた朝鮮人の歴史の中に位置づけられている。



図5 朴順伊さん

朴順伊さんは、佐渡の釜山に徴用された夫から、呼ばれて佐渡に行きました。逃亡をなくすため、妻帯者は、妻を呼び寄せさせたのです。そこで、飯炊きの仕事に就きましたが、敗戦間際には、日本の監視もみるみる手薄になり、みんなが逃亡しました。敗戦の数日前に佐渡を出て、川崎にきて、夫は、独立運動、民族運動に邁進し、順伊さんは、家族を支えるために必死に働きました。

戦争が終わると、戦争産業に従事させられた朝鮮人の多くの男性は失業しました。朴順伊さんのように戦後生活を支えたのは多くが在日コリアンの女性たちでした。

[<http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/newmain/main010.html>,

<http://www.halmoni-haraboji.net/exhibit/newmain/main011.html>]

戦時中の佐渡の鉱山・飯場から、戦後の川崎へ。朴順伊さんが経てきた歴史や地理は、現在の川崎を知る私たちに接続する。私の場合、図4の絵がそうした回路の一つになった。教育を受けていないハルモニたちは文字だけでなく地図の読み書きもできないという説明を聞いたので、朴順伊さんの話を聞きながら代わって整理するつもりでメモをとったのだが、これを班のメンバーが清書し、ワークショップの最終回に各班が作品を発表する場で使ったのである。話には不明確な点があったし、図は不正確かもしれない。それでも、第三者に徴用の実態を伝えるために共同作業する過程で、徴用労働が非人間的であることも、現在朴順伊さんが川崎で生活しながら堅持するプライドも、私にとって以前よりもっと内実ある事柄となった。

しかしもちろん、こうした作業の機会を誰もがもてるわけではない。このような背景説明が資料館サイトの図に添えられているわけでもない。だからすぐにそれとは見えにくい。資料館サイトに描かれる歴史は、その活動に参加する人びとが意味を見出しながら形成したものである。

朴順伊さんは「平和」の証人以外の面をも併せもつ。儒教的な職業観、川崎で盛り上がった民族運動への傾倒。その時々を人間臭く生きてきた朴順伊さんの語りから見える歴史は、どの歴史教科書にも載らないようなことばかりである。在日高齢者一人ひとりの生活と語りにこそ基づく資料館サイトは、たとえば「愛国者」とか「差別を受けてかわいそうな朝鮮人」とかいうわかりやすい像を表現してはいない。それは、サイト訪問者を一方的に啓蒙することを目指すよりも、展示する側がおもしろいと思ったエピソードや事実を提示することにより訪問者にも自ら考えてもらう余地を残すためであるかもしれない。

5. おわりに

人間存在が尊重される論理の博物館の対極にあるのは、植民地主義的な博物館だろう。植民地主義的な博物館建設の方法は収奪と啓蒙である。荻野昌弘はいう。19世紀に発達を遂げた博物館は、植民地における「他者像の構成」という目的に深く関わる装置であった。他者像の構成とは、「他者に関する知識の集積」、すなわち、政治的のみならず物質的・知的に他者を所有する欲望を植民地化によって実現する事態を指す[荻野2002：376-377]。そこでは展示物がどれほど真に迫っていて科学的・美術的水準が高く、観る者にとって楽しいものであろうとも、展示される側／展示する側の非対称的関係が一方的に貫かれる。端的な例は19世紀末前後の列強各国(日本を含む)の博覧会でみられた「人間の展示」である。展示された「野蛮人」たちは、これを観る人びとは明確に隔てられ、当時の社会進化論と人種差別主義を体現させられた[吉見1992：

184-186]。ヒトのモノ化といえよう。

これに対し資料館サイト活動においては、他者像は語り手と聞き手のコミュニケーションから立ち上がる。また、聞き書き場面では聞き手が主導権を握ることが多いが、ふとしたことで形勢逆転しうる。先の2つの感想文はその例である。博物館が人間を展示の素材とするとき、観る側が彼／彼女をモノのように知的に所有するやり方と、観る者に問いかけるような主体として彼／彼女に登場してもらいやり方があるとしたら、「新しい共生の時代を生きる市民」の活動の場にふさわしいのは後者である。

これまで資料館サイト活動について述べてきたが、一つ補足しておきたい。見えないところで資料館サイト活動を支えているのは、2000人ネット以前の、川崎南部のこの地域における長期にわたる活動による成果と信頼関係の積み重ねであろうということである。たとえば聞き書きするからと呼びかけて在日高齢者に出てきていただき、バーチャルな博物館にあっても在日高齢者の実体的な人間像が損なわれないのは、日常的に人間同士の係わり合いがあるそうした実践基盤があるからだろう。その一方で、広域の情報発信手段、訪問者にじっくり見てもらえやすい表現媒体としてのインターネットの可能性には今後も注目したい。

いま、生活史を語るハルモニ、ハラボヂを前にして、私たち次の世代は歴史とどう向き合うのか。歴史博物館が過去のモノを展示しながらも、「あの戦争」「20世紀」とは何であったかをいま私たちが考える「現代展示」の場にするという視点[朝日新聞「記憶を作るもの 歴史博物館」2007.12.31]は、資料館サイトにもあてはまる。私が在日韓国・朝鮮人研究に入ったきっかけは、日本の歴史清算問題を座視することのもどかしさにある。一方で在日高齢者への聞き書きは、研究のためというよりもおもしろさからやめられなくなった。そして今、資料館サイトづくりという場、表現の手段を得ることで2つの流れが合流した。研究と実践の両面から自分にも何かができる可能性のある活動として期待している。資料館サイト活動は、在日高齢者や社会一般のためだけではなく、私自身のための活動でもある。

[注]

¹ 朝鮮において近代普通教育は植民地政策と連動して普及したため、生年によって異なる傾向がある。朝鮮旧来のジェンダー秩序のもと、「女に教育はいらない」と親に言われて就学を認められなかった女性は特に年長者に多い。植民地後期になると今度は皇国臣民化教育が強まった。

² 本稿では、日本による植民地化を契機に渡日し戦後も日本居住を続けた朝鮮半島出身者を指して、基本的には「在日韓国・朝鮮人」と呼び、引用部分によっては「在日コリアン」「朝鮮人」を用いる。指示対象はどれも重なる。

³ ふれあい館は、川崎市の委託を受けて社会福祉法人青丘社が運営する公設民営施設である(1988年開館、所在地は川崎市川崎区桜本)。児童館と社会教育施設を統合した行政機能をもちながら、青丘社

の特色を生かした独自の事業も行われる。

- 4 「かわさきの在日高齢者と結ぶ2000人ネットワーク」と呼ぶこともある。
- 5 在日韓国・朝鮮人高齢者は国民年金制度から排除されている。社会保障における国籍条項は1982年に撤廃されたが、その後の制度改革を経ても、1926年4月1日以前に生まれた在日外国人は制度の谷間に取り残されたままになった〔詳しくは慎1999〕。川崎市には1994年から独自に支給している「川崎市外国人高齢者福祉手当」があるが、月額1万8千円(1998年時点)と、国民年金受給者水準には遠く及ばない。
- 6 個人のどぶろく(濁酒)造りは酒税法で禁じられていたものの、就業機会が限られていた戦後の在日韓国・朝鮮人にとっては一時期重要な生活手段であった。川崎南部にはどぶろく密造とその摘発をめぐるいくつかの逸話がある。
- 7 ③について補足すると、それは公立で独立採算制という意味ではない。営利・政治・信仰など他の目的のための付随的手段としてはない独自の目的があり、その活動の公共的役割を職員が自覚していることを指す。
- 8 歴史博物館の増加の背景として、考古学や古文書解読ブーム〔君塚2003:30〕が指摘されている。
- 9 文章が多い展示が博物館訪問者を疲れさせ、いきおい博物館の歴史展示が短い文章で単純化されがちになるとしたら、インターネットを利用した資料館サイトはその問題を免れる利点がある。
- 10 感想文をサイトにアップするとき、Mさんは書き手を匿名でなく実名で載せることを主張した。その理由を、語り手がフルネームで出るので聞き手も実名で誠意を示すため、と言ったように記憶している。結果的なのか意図的なのか、ともかくもこれが展示空間において相互作用の具体性とリアリティを高めている。

【文献】

- 浜日出夫, 1998, 「歴史はいかにして作られるか——博物館の文法・博物館のリテラシー」『社会学ジャーナル』23: 151-162.
- 伊藤寿朗, 1993, 『市民のなかの博物館』吉川弘文館.
- 金山喜昭, 2003, 『博物館学入門——地域博物館学の提唱』慶友社.
- 君塚仁彦, 2003, 「博物館展示論の視座から『地域博物館論』を読み直す」『大阪人権博物館紀要』7: 14-36.
- 小川伸彦, 1999, 「保存のかたち——文化財・博物館の社会学のために」『奈良女子大学社会学論集』6: 229-235.
- 荻野昌弘, 2002, 「民族の展示——植民地主義と博物館」山路勝彦・田中雅一編『植民地主義と人類学』関西学院大学出版会, 375-390.
- 慎英弘, 1999, 「在日朝鮮人と社会保障」朴鐘鳴編『在日朝鮮人 第2版——歴史・現状・展望』明石書店, 265-295.
- 社会福祉法人青丘社, 1999, 『川崎 在日韓国・朝鮮人の生活と声——在日高齢者実態調査報告書(1998年度)』.
- 吉見俊哉, 1992, 『博覧会の政治学』中公新書.

ウェブサイト

- http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/004/h17.htm (平成17年度社会教育調査——文部科学省 アクセス日2008/01/15)
- <http://www.halmoni-haraboji.net/> (川崎在日コリアン生活文化資料館 アクセス日2008/01/15)